

Exhibition

棚田康司展「〇とー」（らせんとえんてい）

会期：2011年9月22日（木）～10月10日（月・祝）

会場：スパイラルガーデン（スパイラル 1F）



棚田康司「家の少女」Photo: 熊谷順

スパイラルに立ち現れる7体の少年少女、
訪れる人を導く参道のごとき一本の道。

スパイラルガーデン全体を作品と化す、棚田康司・東京初の大規模個展

■取材に関するお問い合わせは、下記までご連絡ください。

スパイラル／株式会社ワコールアートセンター 広報部 加藤美穂、清水さえみ、四元朝子（よつもと ともこ）

〒107-0062 東京都港区南青山 5-6-23 TEL 03-3498-5605 FAX 03-3498-7848

E-mail press@spiral.co.jp <http://www.spiral.co.jp/>

スパイラルでは9月22日(木)～10月10日(月)までスパイラルガーデン(スパイラル 1F)で、棚田康司展「〇とー」(らせんとえんてい)を開催します。

棚田康司は、日本古来の木彫技法である「一木造り」を用いて、少年少女の像を制作しています。ほっそりとした肢体、表情豊かな指先、さまざまな感情を想起させるうるんだ瞳を持つ子どもたち。未熟さや脆さと同時に伸びゆく生命のしなやかな可能性を強く感じさせる表現で知られ、次世代を担う彫刻家として注目されています。本展「〇とー」では、東京で開催する初の大規模個展となります。

7体の新作を中心に、スパイラルガーデンの空間全体で表現する 情報や技術で割り切ることのできない、曖昧で神秘的な世界の存在

東京の街中でもそこかしこに見かける小さな祠や、石碑、神社や家々にある神棚。わたしたちは古来から人知を超えた存在を祀り、祈りをささげることで、目に見えないもの、説明のつかない現象との共生を図ってきました。しかし、高度に発達した技術、溢れる情報によって、その存在はいつの間にか私たちの意識から忘れ去られつつあります。

展覧会に際し、何度もスパイラルに足を運んだ棚田は、「建築として緻密に計算されていて、場所も青山という東京の中央にあり、人間臭さや神秘的な気配が一切ない空間。この空間に敢えて神棚や神社仏閣が感じさせる神秘性を拡大して持ち込んだら面白いと思った」と話します。エントランスからアトリウムまで、訪れた人を一直線に導く参道のごとき道。「風神雷神」をヒントに制作された一対の立像。青山通りに面した窓の向こうに広がる景色から着想を得た赤い瞳の花嫁。家々を守るように佇む少女。棚田は、曖昧で未熟であるがゆえに神に近いとされる少年少女の姿をした像 7体を中心に、スパイラルガーデン全体を作品と化し、訪れた人々を情報や技術で割り切ることのできない曖昧で、神秘的な世界へと導きます。

本展では、訪れる人が作品と出会うことで、日々の暮らしの中で忘れかけていた尊さや、人々の生きる知恵に思いを馳せ、次なる一步を進めることを企図しています。

本展の見どころ

①ますますその活躍が注目される棚田康司、東京初の大規模個展

棚田康司はこれまで国内外で多くの展覧会に参加、2008年にはヴァンジ彫刻庭園美術館(静岡県)での個展を成功させるなど着実にキャリアを積み重ねてきました。本展は、次世代を担う彫刻家としてますますその活動が注目される棚田にとって、東京で開催する初の大規模個展となります。

②棚田が表現する「風神雷神」とは

螺旋状の吹き抜け空間(アトリウム)に立ち現れる「風の少年」と「導雷少女」。この作品は館内を何度も歩き「建築として完璧だ」と感じたという棚田が、ふと見上げた先の天窗からぼつかりと空が見えたことから着想を得て、「風神雷神」をヒントに制作しました。私たちがイメージする「風神雷神」とはかけ離れた姿をした少年少女。地上から彼らを見上げるとき、その視線の先にある空、そこを渡る風や雷、私たちの力の及ばない大いなる存在に気がつくのです。

③スパイラルガーデン全体を作品として提示

ギャラリーや美術館と違い、カフェやショップの利用などさまざまな目的を持った人が訪れるパブリックなスペースであるスパイラルガーデン。展示に際し「場所性」を特に意識したと語る棚田は、スパイラルを神秘的な存在と人との境界線と位置づけ、スパイラルのエントランスからアトリウムまで導く、まるで参道のような一直線の道を設置。彫刻だけでなく、訪れる人が彫刻と出会うスパイラルガーデンの空間全体を作品として提示します。

④「〇とー」の意味するもの

丸と棒、円と線、ゼロとイチなど、見る人によってさまざまなイメージを想起するタイトル。この言葉は江戸時代の判じ絵にヒントを得て「〇＝螺旋(スパイラル)」、「ー＝園丁(ガーデン)※」から連想されたもので、スパイラルガーデンをさしています。さらに、螺旋は上昇する風(＝自然)を、園丁は整えられた庭園(＝人工物)をイメージさせることから、本展における「自然」と「人」の境界としてのスパイラルガーデンのことも示唆します。

※園丁とは、庭師のことを意味します。本展タイトルでは、転じて整えられた庭園の意味で使っています。

開催概要**棚田康司展「〇とー」(らせんとえんてい)**

会期:2011 年 9 月 22 日(木)~10 月 10 日(月)

会場:スパイラルガーデン(スパイラル 1F)

時間:11:00~20:00 無料

主催:株式会社ワコールアートセンター

企画制作:スパイラル

出品予定作品:「風の少年」「導雷少女」「家の少女」「記念日」ほか全 7 体

【同時開催】 棚田康司 展「生える少年」

会期:2011 年 9 月 1 日(木)~10 月 1 日(土) 11:00~19:00 ※日・月・祝日休廊

オープニングレセプション 9 月 1 日(木)18:00~20:00

会場:Mizuma Art Gallery 〒162-0843 東京都新宿区市谷田町 3-13 神楽ビル 2F

TEL: 03-3268-2500 FAX: 03-3268-8844 WEB: <http://mizuma-art.co.jp>**展覧会開催にあたって**

手足がひよろりと細長くデフォルメされ、物憂げな目つきをした少年の像。

これが、「DOMANI・明日展 2006」で初めて棚田康司の作品と出会った時の印象であった。どこか落ち着きどころを案じている様は、自信を喪失して彷徨う日本人のようにも、あるいは傷つきながらろうじて均衡を保つ、不屈の姿勢のようにも映った。作品の印象が変化したのは、ヴァンジ彫刻庭園美術館で実施された個展(2008 年)である。伸びやかな空間に配された 12 体の少年少女の像は、ジュリアーノ・ヴァンジの彫刻と共に、その場の空気を吸い、すつくと立っていた。彫られた像はか細いが、そこに佇む子どもたちは憂いの中に穏やかな笑みを浮かべ、眼差しは強く、まるでこれから伸びようとする樹の未来を湛えているようであった。

本展では「スパイラルガーデン」を支持体に、7体の新作を育える。

喧騒から一步離れ、ひとりで楽しむための都市の公園のような空間。それが、設計した建築家・楨文彦によるコンセプトである。街も建物も、ある種人工的に造り込まれたこの場所で、棚田は風・雷・水といった自然の要素と人間社会との間に位置する神秘性を主題に選んだ。これは、木彫という、いわば生きた「木」を扱う棚田ならではの解だろう。棚田は一本造りという技法を用い、木の流れを探りながら姿を導き出していく。描いたフォルムを木に押し付けるのではなく、じっくり向き合い、時に共闘しながら育むと言っても良い。展覧会においても同様に、展示空間の特性を読み解きつつ、作品が場所に与える意味を思考した。

現世と来世、自然と人工、善悪。かつて日本では、これら相反する要素を神や子どもなど中間的な存在でつなぎ、祈り、畏れることで共生する術を見いだしてきた。9.11 のテロやリーマンショックなど世界を覆う事件が相次ぐ度、グローバリズムの名の元に正誤、貧富、勝敗など、物事を二極化して断じる風潮が高まる現代。棚田作品の持つ両義性や未熟さは、混迷する社会を生き抜くヒントとなるだろう。

そして、展覧会の準備を進めるさなかに起こった、未曾有の天災。この後、私たちの社会は大きく変わろうとしている。中央集権制や近代的な手法としての都市計画は転換点に差し掛かり、技術や情報に対する絶対の安心感は揺らぎつつある。機能や効率に基づいて設計しても、割り切れない人々の思いや、土地に対する愛着。どんなに準備しても抗いきれない自然の力。合理的な管理社会が行きついた果てに、私たちは各々の持っている生命力や思いに改めて向かい合い、古来より培われてきた自然と共生する術や知恵に目を注目し始めている。

本展に現れる7体は、美術作品という枠を超えてスパイラルガーデンに根を生やし、私たちの思いを受け止め、進むべき道を静かに謳うだろう。

スパイラル キュレーター 加藤育子

棚田康司 プロフィール

1968 兵庫県明石市生まれ 神奈川県茅ヶ崎市在住
 1993 東京造形大学造形学部美術学科Ⅱ類(彫刻)卒業
 1995 東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了(深井隆研究室)
 2001 文化庁芸術家在外研修員として7ヶ月ベルリンに滞在
 現在 神奈川県にアトリエを構える

●主な展覧会:

2011 「ZIPANGU—31人の気鋭作家が切り拓く、現代日本のアートシーン。」日本橋高島屋 /東京
 2010 「SO + ZO 展 未来をひらく造形の過去と現在 1960s→」Bunkamura ザ・ミュージアム /東京
 「創造と回帰 | 現代木彫の潮流」北海道立近代美術館 /北海道
 2009 個展「結ぶ少女」ミヅマアートギャラリー /東京 (2006、2004、2000)
 「Essential Experiences」Museo Regionale d'Arte Moderna e Contemporanea /パレルモ、イタリア
 「彫刻の五・七・五」沖縄県立芸術大学付属図書・芸術資料館 /沖縄
 2008 個展「十一の少年、一の少女」ヴァンジ彫刻庭園美術館 /静岡
 「TARO 賞の作家Ⅰ」川崎市岡本太郎美術館 /神奈川
 「Off the Rails | 反主流」Mizuma & One Gallery /北京
 2007 「物語の彫刻」東京藝術大学大学美術館陳列館 /東京
 「場の記憶 虚実の狭間で 第三回造形現代芸術家展」東京造形大学付属横山記念マンズー美術館 /東京
 「日本—メキシコ彫刻友愛展」ユカタン州メリダ、メキシコ
 2006 個展「棚田康司展」void+ /東京
 「ライフ」水戸芸術館現代美術ギャラリー /茨城
 「DOMANI・明日展 2006」損保ジャパン東郷青児美術館 /東京
 2005 「YOU or IT」(O JUN×棚田康司)ミヅマ・アクション /東京
 「第8回岡本太郎記念現代芸術大賞」川崎市岡本太郎美術館 /神奈川
 2004 「TOKYO STYLE」MILLIKEN Gallery /ストックホルム、スウェーデン
 2003 「皮膚・身体・コミュニケーション」女子美アートミュージアム /神奈川
 「彫刻の身体」東京藝術大学大学美術館陳列館 /東京

●受賞歴

2010 第20回タカシマヤ美術賞
 2005 「第8回岡本太郎記念現代芸術大賞」特別賞

参考資料:過去作品



衛る少女 (2007)
 樟材—木造に彩色、レース糸
 171x37x38cm
 撮影:今井智己
 ©TANADA Koji
 Courtesy Mizuma Art Gallery

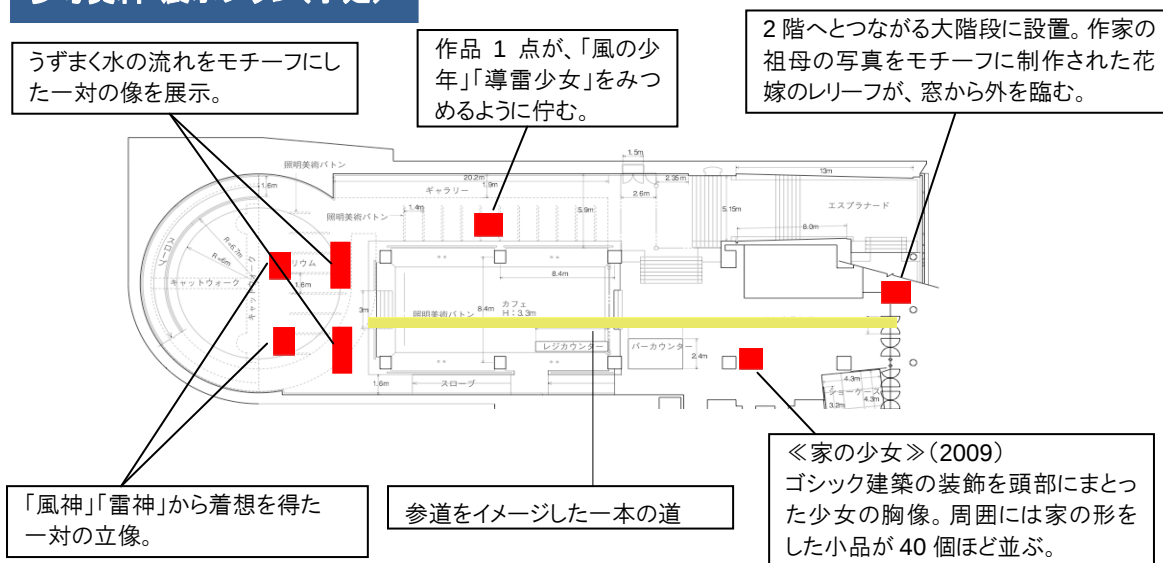


木浅日の少年(2008)
 榿材の一木造に彩色
 139x39x33.3cm
 撮影:熊谷順
 ©TANADA Koji
 Courtesy Mizuma Art Gallery



月の少年 (2008)
 樟材に彩色、レース糸
 36.5x33x33cm
 撮影:熊谷順
 ©TANADA Koji
 Courtesy Mizuma Art Gallery

参考資料: 展示プラン(予定)



参考資料: 棚田康司インタビュー

—今回の展示に際しては、何度もスパイラルを見学されたと伺いました。美術館やギャラリーのようないわゆるホワイトキューブとは異なる空間ですが、どのような感想を持たれましたか？

きれい、ですね。通りからなにげなく入っていくと、一番奥の円形の部分へ、さらにスロープから 2 階へと無意識のうちに奥へ奥へと導かれていく。非常に計算されて作られている、というのが最初の印象でした。また、生身の人間が入って完結される場所、という印象もあります。そういった意味で、ここに人型の彫刻を置くとどんなことが起こるのか、どういう展開ができるのかと考えさせられました。

スパイラルガーデンは広いし、中央のカフェのように、ギャラリーで何をしようとか関係なくコーヒーを飲んだり、食事ができたりする異空間を内包している。どうしたらこの人たちにも作品と向きあってもらうことができるのかと考えました。私の彫刻は、音を出すわけでもなく、動くわけでもないですから、最初はちょっと難しいな、と思いました。

ホワイトキューブとは違うスパイラルにどんな要素を入れるかということは、仕事を進めながらあれこれと考えました。神棚や神社仏閣が感じさせる神秘性を拡大して持ち込んだら面白いと考えたのは、スパイラルがそういうものとは全く違った空間だったからかもしれません。

—スパイラルを訪れた際にアトリウムの天窓から見た空がきっかけとなって「風神雷神」のアイデアが浮かんだと伺いました。

そう、半円形の天窓から空がみえたんです。スパイラルは、デジタルかアナログかという、デジタルのイメージで、自然光が入ることをあまり想像していなかった。私はどちらかというとアナログの人間ですから、空が見えた時にちょっとほっとしたんです。そういうところから自分の作品を置く隙間を見つけました。

今回の展示では、自然というものに対して、人間との間の存在、つなぐ役割として、神様という最高の領域から人間までの間くらいに、彼ら(作品のこと)を持っていきたい。姿は普通の少年少女に見えるけれども、どこか違うような。風だったり、雷だったりというもの、ごく身近だけれど絶対的なものですね。そんな部分を、タイトルをみて、作品をみて感じてくれるようになればと思います。

スパイラルの空間の話に戻りますが、ひとつ面白いと思ったことがあります。それは、スロープを上がっていくと、アトリウム全体を俯瞰できること。地面から見た時は作品は上の方に存在していて、ある種の神秘的な感じを受けるわけですが、

スロープを上がっていくうちに視点が変わって、神秘的な領域の方から見ることになる。それをつなぐ役割を彫刻がする。俯瞰できるというのはスパイラルならではの空間でできることだな、と思いました。

一 棚田さんが作品を制作される場合、設置する場所と作品との関係はどのように意識されていますか。

例えば人間の場合、お父さんとお母さんがいて私がいる。男と女という対極の間に子供が存在する部分があります。男という性、女という性の間、いわば、性の境界線に立っているというか。その存在を彫刻で考えた時に、場所と人との間、境界線の部分に立たせたいという気持ちになってくる。今回のスパイラルの場合は、神秘的なものと境界線を特に意識しました。

一 風神、雷神、水・・・、今回の作品は、わたしたちの身近に存在する自然をモチーフにされていますね。スパイラルという人工物として完成された空間の中に敢えて対比的な要素を主題として持ちこむのはとても面白いと思いました。

当初、スパイラルでの展示の話をいただいたとき、「スパイラルガーデン」という「庭」に、彫刻の木を生やそう、という話をしていました。私の作品は木を素材にしているから。彫刻を通じて、神秘的な世界がある、ということに導けたらと思いました。日本人の特性としてもものの中に命を見る、というのがある。その辺をうまく展示のときに引き出す、というか呼び覚ますことができればと思いました。

自然について言うと、自然とは身近な存在なんだけど、その存在を常に意識しておかないと、大変ことになってしまう。それがこのまえの震災だったと思うし、震災だけでなく、津波や原発の問題にもつながっていくと思う。人間の思い込みで物事を進めていくと、いやでも気付かされる時がくるということを震災で学んだし、スパイラルに向かっていく時には、そのことが常に頭にありました。

一 「家の少女」は、東日本大震災のニュース映像で目にした光景から着想を得たと伺いました。この作品に込められた想いを教えていただけますか？

実際には、「家の少女」という作品は震災のときには既にできあがっていました。でも震災後に見たTV映像が頭にこびりついて、しばらくは何も手がつかない状態の後、自分は何ができるだろうと考えた時、彫刻をやっていくことしかできない、ということを変えて思いました。そこで自分が作った作品と映像とがシンクロしたんですね。もともと作っていた小さな家(の彫刻)を「家の少女」の周りにおいてみて、「いけるかもしれない」と思った。だから、震災から着想を得てこの作品を作ったということではなくて、震災を通して何もできなかった自分が、作品によって救われた、という体験でした。家が何軒もできていくとそれが街になって、都市になっていきます。私が見たのは非常に悲惨な映像だったのですが、この作品はそれを転換させてプラスに見えるような存在にしていきたい、と思っています。

一 棚田さんの彫刻はこどもの姿をしていますね。そのことによって、棚田さんの作品を見る人が、自分の子供のころのことや、ずっと昔の記憶に向き合うきっかけにもなっている気がします。

「導雷の少女」を見た知人に、モデルにはしていないけれども「姉に似ている」と言われました。同じように、誰もモデルにしないで作品をつくると、姉に似てくるらしいですよ。それはもしかしたら、母親の少女時代の写真を見た時の記憶からそうなっていくということもあるだろうし、身内の、一番身近な女性に似ていくということがあるのかな、と思います。

つまり、作り手である私自身の記憶が、無意識に作ったとしても作品の中で出てくるわけですね。それを誰かが見た時に、「これは何だろう」と思って、そこから自分の小さな時の記憶に戻ってくれてもいいし、近所に似ている子がいる、と思ってくれてもいいし。その人の記憶とか時間とかに、この作品がずっと入って行ってくれればいいなと。

私は、自分の目指す彫刻というのは、それを通して自分に対峙ができる、そういうモノであって欲しいと思っています。今回の展示を見て、その人の人生だったり、何かの事件や天災のことであっても、人間にまつわる様々な事象を想起していただければいいです。その人なりの生きてきた時間の集積の中から何かをひとつずつ呼び起こすような存在になればいいかな、というふうに思っています。

2011年6月30日 アトリエにて